
春香～ハルカ～

OB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春香〜ハルカ〜

【Nコード】

N4152C

【作者名】

OB

【あらすじ】

イジメにあつた少女を介護するため、少年は自分の家へ案内する。時刻は夜のため、少女に泊めることを勧めた。

昨年こぞの夏のことだった。

俺おれと同じ年の女の子が傷だらけで倒れていた。

体育館たいいくくわんの裏側うらがわでイジメられていたんだろう。俺おれが近寄ると怖こわがって離れようとしていた。

「何もしない」

そう言いってその子を安心させようとした。

「嘘……」

返答こたへは常に同じで決して信じてくれない。

「何なにがあったか知らないけど、とりあえず名前だけでも教えて」

「長谷部……春香」

ようやく他のことも話してくれた。

「そうか、俺おれの名前は立川樹たちかわいつき。とにかく俺おれの家に行こう」

嫌いやがる春香はるかを連れて行く。無理矢理むりりというのは少々辛いつらいが、傷だらけだ。

家に着くと俺おれは早速救急箱きゅうきゅうばこを取り出した。

腕うでには切り傷きりきずが数ヶ所。背中せなかには大量たきりょうの痣あざ、体からだは少し水みづで濡ぬれている。

水みづでもかけられたのだろう。

「大丈夫？」

春香はるかは黙もくって頷うなづいた。

「……立川さん」

「樹きでいいよ」

笑顔えんごで答こたえると、春香はるかは小さく俯うついた。

それから無言むごんで数十分すうじゅうぶんが経へとうとしていた。

「……帰かえります」

その言葉ことばに俺おれは帰かえろうとする春香はるかを慌あわてて止とめた。

「泊まったほうがいいよ」

外は暗い、もう夜の十時はまわっている。

「俺は何もしないから」

「・・・嘘。私、この前も同じようなことあった・・・。何もしないと言ったから、信じたのに・・・」

その先は聞きたくない。

泣きそうな表情丸出しで、俺を困らせた。

「男みんながそういうわけじゃないと思うよ、俺は大丈夫だ。高校生だし、健全だ」

俺は何を滅茶苦茶なこと言ってるんだろう。

「・・・信じていいの？」

意外な言葉が返ってきた。

驚いた俺は慌てて大きく頷く。

しかし、よく考えると俺は健全な学生でもあるけど、やっぱり思春期っていうこともあるしなあ・・・。

変にいやらしい妄想が脳内で発生する。

「だめだ」

必死に俺は脳内の妄想を取り消す。春香は遠くから俺を眺めている。

「寝ないの？」

「・・・寝れない」

小さいけどかすかに聞こえる。

一緒に寝てあげようか？ そんな一言が俺の頭に浮かんだが、そうはいかない。

春香の信頼を壊す気が、俺。

変な脳内妄想が夜中まで続いた。

朝八時過ぎに俺は目を覚ます。

春香はとっくに起きていた。

「・・・嘘つき」

脳内妄想の結果、俺は春香に手を出してしまった。

何て言えばいいだろう。

俺は春香の泣き顔を見続けた。

静かに瞳から流れる涙を見ているとどうも胸が痛い。

春香はすっかり怯えていた。

何をやっているんだろうな、俺は馬鹿だ。

後悔の念が脳に響く……。

目の前には叫ぶことなく、無言で涙を流している春香がいた……。

(後書き)

とりあえず読んで欲しいと願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4152c/>

春香～ハルカ～

2010年11月27日20時03分発行